

第1回認知運動療法フォーラム

認知運動療法との出会い、そして展望

〜2027のリハビリテーション訓練室に向かう〜

対談者 千鳥司浩・荻野敏

認知運動療法との出会い

荻野

それでは、第1回認知運動療法フォーラムを始めたいと思います。一体、認知運動療法フォーラムとは何か、というところからまず簡単に話をさせていただきます。日本認知運動療法研究会の一つの委員会として、認知運動療法フォーラム委員会というのを作ろうということになりました。で、その中では、僕ら日本認知運動療法研究会の理事が色々対談しながら、様々なディスカッションをたくさん積み重ねて、そういったディスカッションの内容を日本認知運動療法研究会のホームページにどんどんアップして、情報を発信していこう、それが認知運動療法フォーラムの大きな目的になります。で、その委員会の委員長に一応僕が、なることになりました。そして、愛知県認知運動療法研究会の中で第1回フォーラムというのを開催しようということになったのです。そし



千鳥 司浩 (ちどり かずひろ)

プロフィール

1966年愛知県生まれ。中部リハビリテーション専門学校卒。現在は中部学院大学（岐阜県関市）リハビリテーション学部理学療法学科准教授。日本認知運動療法研究会 理事。

認知運動療法フォーラム

てテーマとして、第1回認知運動療法フォーラムは「認知運動療法との出会い、そして展望」〜2027年のリハビリテーション訓練室に向かう〜という壮大なテーマを掲げさせてもらいました。対談の2人というのは僕と中部学院大学の千鳥先生で、この2人で、対談をさせてもらいたいと思います。自己紹介が遅れました。僕は、国府病院の理学療法士の荻野と申します。日本認知運動療法研究会の理事をやっております。先生じゃあ自己紹介を。

千鳥 中部学院大学の千鳥です。日本認知運動療法研究会の理事です。愛知県に住んでいるんですけど、岐阜の関市にある中部学院大学に勤めています。

荻野 あっさりしていますねえ(笑)。元々の、話の展開といいますか、スタートというのは、出会いということから話をしていきたいと思ってるのですが、この出会いというのは、僕と千鳥先生の出会いというわけではなくて、認知運動療法のことです。ちなみに僕と千鳥先生の出会いはですね、先輩後輩の仲でして、僕が先輩で千鳥先生が先輩で、もう今から20年ほど前の養成校の中で出会っています。そしてそれから何年か経って認知運動療法を通じて、非常に懇意になっっている、そういう出会いです。で、元々の認知運動療法との出会いですが、僕の方から、簡単に話をさせてもらいます。僕が認知運動療法に出会ったというのは、今からもう、どうでしょうか、十数年前になりますかね。たまたま、専門学校の教員をやっていた時に、日本認知運動療法研究会の現会長の宮本省三先生が高知医療学院から、講演に来てくれました。それは、愛知県理学療法士会の招きで、講演に来てくれたんですね。で、その時に、僕が勤めていた学校が会場だったのです。まだ入

って間もない頃でしたので本当に下っ端で、パタパタパタと動いていました。で、一緒にお昼ご飯を食べたり、車を運転したりとかして、下っ端の働きをしたのです。その時に、はじめて講義を聴く機会がありました。ところが正直その講義を聴いてもわけが分からなかったのです。言っている意味が分からない。言語が、理解できなかった。それから、何年か経った後に、たまたま、日本理学療法士協会の冊子に認知運動療法のベーシックコース(注1)をやりますと記載されていた。日本認知運動療法研究会はあの頃まだなかったのですが、認知運動療法のベーシックコースをやりますと。あの時さっぱりわけが分からなかったから、一体何だったのかっていうのを聴きに行こうと思って応募したのですよ。それが3月の終わりのコースでした。しかし、3月終



荻野 敏 (おぎの さとし)

プロフィール

1967年愛知県生まれ。中部リハビリテーション専門学校卒。現在は国府病院(愛知県豊川市)リハビリテーション科に勤務。日本認知運動療法研究会 理事。

わりのコースに申し込んだのですがオーバーフローしてしまつて受けられませんという回答が葉書で来たのですね。でも8月に全く同じコースをやりますから是非どうぞということと、8月の終わりに高知県の桂浜、坂本龍馬の銅像が立っています。その桂浜荘というところで2泊3日のコースに参加しました。そのときの僕のコースを受けた感想は、一言で言えば、愕然とした、ショックを受けたという言葉につきます。で、これは僕よく言うのですけども、その時に、学校の教員をやっていたのですが今までの自分の治療は一体何だったのだろうかと思ってすごく衝撃を受けました。有り得ないかも知れないけど、今、自分が教えている学生の後ろ側に、その学生が将来治療するであろう患者さんの顔が見えたのです。そんな気がしたのです。そんなことあるわけないじゃないかと思われるかも知れないけど僕は見えたのですよ。見えた気がしたのだから仕様がな。本当にショックを受けましたというの、僕の第一印象でした。先生はどうでした？

千鳥 これも、よく話すんですけど、その前にちよつと訂正をさせて下さい。さつき、先生が愛知県で呼んで宮本会長が来てくれたって言ったのだけれど、あれは県の事業じゃなくて愛知医科大学のセミナー事業なのです。あの頃愛知医大ではセミナーをやっていたのだけれど、年に一度、誰かトピックス的な人を呼んでいたのですね。で、その年は、誰にしたらいいかつてことで、そのときジヤナルとか見えていて、認知運動療法を話してもらおうということになったのですよ。でも本当にあの講義を単に聴いただけではデジヨックとの違いとか、よく分からなかった。

荻野 そうそう。
千鳥 デジヨックと何が違うのだろうかという感じで、不安定板も使う

し、あの時はよく解らなかつたのですね。でも、すごく運動学習っていうものを、考えている治療法だなんていうのは伝わってきた。やっぱりそこは大事じゃないかなと感じていたのですね。そして、第1回の講習会を受けたのですよ。あの頃は本当に実技も何にもなくて、それこそご飯食べて、お風呂入って、そこからまたナイトセミナーとかを行って皆でディスカッションするような、もうひたすら講師陣が話すっていうようなコースだったので、僕も、僕はたまたま一番前に座っていて、もうむちゃくちゃ攻撃されました(笑)。昔の僕の業績なんかを洗ってもらえば分かると思うのですが、電気生理とかバイオメカとかそういうことばかりだったので、だから、すごく否定されたのです。否定されてむちゃくちゃ悔しかったのだけれど、でもそうだなって思っちゃつたのです。コースの時とかもよく話すんですけど、理学療法士の3種の神器、つまり筋電図と床反力計と3次元動作解析があれば、どんな解析でも出来ますよ。演題もたくさん出せますよ。けれど、「それでどういう患者さんに、その結果に基づいてどうやってアドバイスや治療を進めていくのだ」みたいなことを聞かれたのです。分かっていたのだけれど、ずつとそういう研究をしていて、そこを突かれたからむちゃくちゃ悔しかった。ちよつと、僕の反応は違っていました。僕と先生の反応はちよつと違っていたのですね。

千鳥 そうですね。
荻野 僕ももうショックでしたから。これが本当に適切な表現かどうか分からないけれど、今まで僕がやってきた治療っていうのは拷問じゃないかって、そこまで思い詰めましたからねえ。

千鳥 真面目だったので、先生(笑)。

荻野 反応は様々で、色んな人がいるとは思いますが。

千鳥 はい。

荻野 僕のような反応をする人もいれば、先生みたいな反応をする人もいれば、全く反応もしない人もいます。将来的には認知運動療法みたいなものが当たり前のような存在になっていけば、別に反応も何もないかもしれません。ところで、先生はその後どういう行動を起こしました？拒否みたいなことをした後には、どのような行動をとったのですか？

千鳥 自分の中では、拒否っていうよりかは……。それに対して言いません。自分がいたのも当然分かっているから、勉強しなきゃいけない。そういう視点も、見てかなきやいけない。うことは感じました。でも勉強しようと思っただけ、その頃はあんまりテキストもないし、こういった勉強会もない。

荻野 その時はまだ、パラダイム本（注2）は出ていない……。千鳥 出ていない、出ていない。だから勉強の仕様がなかった。それで宮本先生がくれたのが、イタリア語のコピーだったので。

荻野 イタリア語！（笑）。

千鳥 分かるわけないし、ただ図だけ見て器具を色々作ったりしてやったのだけど、やり方も分からないという状況だったので。それでもやっぱり本を、少しそれに類似した様な本を読むようになったってことが変わった点かな。

荻野 例えば、どんな本を読みました？

千鳥 パラダイム本が出版されてからだけど、それ以外の書籍では先生も好きだと思いますが、一番ショックだったのが、何だったかって、身体感覚？

荻野 はい。「身体感覚を取り戻す」（注3）。

千鳥 そうそう。あの人の本なんかはすごいショック……。

荻野 斉藤孝ですね。

千鳥 教育者であるのにも関わらず、人間の身体のことっていうものをすぐく考えていて、それに、確からしいなって感じたから。僕たちが専門だと思っていたのに、そんな医学の領域とは離れたところの人が、ここまで考えているのだったっていうのを知った時にすごくショックでしたね。

荻野 僕も同じ本なのですよね。NHKブックスでしたね。

千鳥 はい。

荻野 「身体感覚を取り戻す」という本を、たまたま僕は近所の本屋で、そこにふらっと行って見つけたのですよ。脳科学の本、まあ、あんまりあの頃は、脳科学はなかったのですけど……。

千鳥 なかった、なかった。

荻野 精神世界とか、宗教とかそういう系統のところにはぼつんと「身体感覚を取り戻す」っていうのがあった。身体感覚という言葉にすごく、魅力をあの時感じて……。認知運動療法を勉強して、まだよく分かってなかった時期で、それこそ先生も言ったように、論文も殆どなかったような時期だったので、ふとそれを手にとったのです。僕はいつも目次を見るのですよ。手にとって、目次をたらたらと見る。そして、これは面白そうだ、と。早速買って読み始めたから、これまた愕然としましたね。斉藤孝っていうのもピンと来ない人もいるかも知れないですけど。

千鳥 三色ボールペン。

荻野 そう。三色ボールペンとか、あと「声に出して読みたい日本語」とか、ああいうシリーズを書いていた。あとNHKの朝の番組で「にほんごであそぼ」なんていうのもやっていますね。その人の

本を読むと、例えばイチローの話だとか、あと、ガルウェイっていうテニスのコーチの話だとか、そういったことがバーツと書いてある。僕はそれでもびっくりして、「理学療法士とか作業療法士は果たしてどこまで身体を知っているのかな？」と、とてつもなく疑問に思いましたね。

千鳥 なるほど。

荻野 で、もう一つ僕が感銘を受けた本は、竹内敏晴という人の本なのです。「ことばが劈（ひら）かれるとき」（注4）という本です。

元々豊唾の人なのですが、成長して行くに従って豊唾は少なくなつて最終的には何をやめたかというところ、演出家をやられていた人なのです。その人が書いている本なんかも、すごく身体とか、コミュニケーションなんかもよく書かれていました。ここまで演出家や教育者は、身体をもものすごくよく考えているのだなど。スポーツ選手もそうですよね。ものすごくよく考えています。何か先生、他にもありますか？

千鳥 その後は、脳の勉強したいなと思って「脳の中の幽霊」（注5）

つていう本を読みました。あの本も普通の一般書として売られていましたね。あれもすごいですよ。それであの後くらいに茂木健一郎がNHKブックスで・・・。

荻野 「心を生み出す脳のシステム」（注6）？

千鳥 そう。すごいな。この人と思つたら、あつという間に有名になりましたよね。あの頃は茂木健一郎なんて全然知らなかったし。あの本もすごくて、医者でもないのに何でそこまで脳のことを知っているのかっていうのがすごくショックでした。

荻野 僕も先生も、本を読むことによつて、どんどん世界が広がるというか、例えば今までは理学療法とか、そういつたりハビリテーシ

ョンの世界しか知らなかった。「井の中の蛙大海を知らず」じゃないですが他を全然知らなくて、認知運動療法を知ることによつて、つまり、身体や環境や身体と環境との相互作用とかを知ることによつて世界が広がる、そんな感覚がありますよね？

千鳥 はい。

荻野 そちら辺のストラテジーはちょっと似ていますね。

千鳥 でも、基本、僕は本嫌いだったのですよ（笑）。

荻野 言っていましたね。なんで、豊川にはそんな本が多いのかって。僕がやたら本をチェックして、あの頃まだ日本認知運動療法研究会のホームページに掲載があったのでいろいろ書き込んでいたのですよ。そしたら、メールか電話がかかってきて「豊川にはそういう本が多いのか」と（笑）。

千鳥 そういう風に見てないから探せない。

荻野 知らないからですよ。

千鳥 あのと自分の自分を思うと・・・。

荻野 今だったらおそらく見つけ方がまた違っているとは思いますが、1年目2年目の頃と全然見方は違うでしょうね。

臨床と教育について

荻野 認知運動療法に出会った頃は、僕はまだ学校に勤めていて、千鳥先生はまだ臨床にいましたよね。その後の進み方が変わっていきましましたね。

千鳥 まったく反対になりましたね。

荻野 たまたま僕が、今度は学校から臨床に仕事の場を移して、先生が今度は臨床から学校に仕事の場を移しました。社会の中の役割が

変わったと思います。僕ら臨床家は、現状からいけば患者さんを治すということが大前提で、一番の大きな仕事ですよ。先生は今の役割、もちろん学校教育の中で理学療法士を育てるといのが大きな役割だとは思いますが、その役割の向こうにある願望や考えみたいなものはありますか？

千鳥 今、物理療法とかも教えないといけないので教えますけど、やっぱり学校の先生って、結構難しいですよ。やらなきゃいけないことが多いし、必要じゃないと思っても話さないといけないこととかもあります。でも、それはやらなきゃいけないことでもある。本当に伝えたいことは違うのだから、すごくギャップがあるからそこをどう展開していくかってことを今も考えてはいますが、最終的に何が大事なのかっていうことを自分自身で判断できる学生を育てたいなって思っています。だから、それこそ物理療法とかいろんな授業、装具療法も含めて全部ひと通りはやらなきゃいけない。その中で将来臨床に出たときに何が大事なのか、どういう考え方をしていけば良いのかっていうことを伝えなきゃいけないのかなって考えています。どう展開するのか、何が確からしいのか考えられる力を持った学生に育てないと駄目だなと思っています。

荻野 そういう人でないとこれから先は残れないかもしれません。上から言われたことをそのままやっていけばいいという時代ではもうなくなってしまう。それだけリハビリテーション自体の社会的立場というか、相当ここ数年で危うくなっているような気がします。それは保険点数の様々な制限とかで、顕著に現れていることだと思うのですよ。そういうことを考えていくと、やっぱり僕ら一人一人が考えて、本当に患者さんを治すということ

真摯に考えられる、どんな方法でもというとまた、ちよつと語弊があるかもしれませんが、やはりセラピストになったときに何が正しくて何が正しくないのか、一人で考えられるということ。すごく大事だと思うし、そういう意味では今、先生がたずさわっている仕事は重要ですよ。

千鳥 そうですね。学校を出て臨床に行きますからね。

荻野

はい。

千鳥

自分で考えて動ける人間っていうのを育てないと駄目じゃないのかなと思います。でも、やっぱり今の学生は自分の考えで動くというよりも、「長いものに巻かれよう」といった子が多い。

荻野

そういう印象を受けますか？

はい。多いと思います。それは他の学校を見ているとそうですけど。でもそれについても色々な考えがあるでしょうね。18歳人口がこれだけ減っているからってことも言われています。古代メソポタミアの頃に「最近の若いやつは」みたいな落書きがあつたなんて、そんなことも言われています。僕らみたいに段々年を取ってくる、そこからみた若い人達ってまた違うかもしれない。僕らが若い頃もある程度上の人たちから新人類なんて、呼ばれ方されてきましたから。同じ部分もあるかもしれないですね。いずれにしても、先生が今言っていた将来患者を見る立場になる学生を育てるといふことで、学校教育っていうのはすごく重要ではあるかと思うのですが、当然学校教育を卒業する前に僕らみたいなところで臨床実習を行いますよね。学校側として、例えば様々な治療手技をやっているとかがありますよね。何かアドバイスみたいなこととかしますか？

千鳥 うちの学校はまだね、2年生までしかないから見学実習だからそういうことは話していませんね。でもそういう形で振り分けると思います。荻野先生も学校の教員のときそうでしたよね？

荻野 そうですね。例えばうちの病院に来てもらって認知運動療法をやっているところをみると、おそらく面食らうと思います。何も事前情報がなければ特にそうでしょう。もちろん、考え方によってはむしろシヨックを受けさすほうがいいのかなんて思うときもありませんけど。臨床実習について先生はどう思っていますか？

千鳥 僕の学生が今後育ってきて認知運動療法にすごく興味があつて、すぐできそうな学生だったら認知運動療法を見せてあげたいなとは思っています。したがって臨床の先生たちには、「どうだ、違うだろう」っていうところを現実場面として見せてあげてほしい、結果をしっかりと出して違うだろうっていうところですよ。例えば物理療法を使わなくなつて変わるじゃないか、ということを目の当たりにさせて欲しいなと思います。

荻野 臨床実習もなかなか難しいところがあるとは思っています。これだけセラピストや学生が増えてくると、当然臨床実習の数も増えてくるわけで、色々なバイザーが出てきますよね。僕は他の病院のことは分からないですけども、臨床実習に来たときにうちの病院でやっているようなこと、つまり認知運動療法は卒業するまでは勉強するなつて言っています。国家試験の邪魔になるから。

千鳥 そうなのですよ。でもできる学生には教えてあげてもいいと思いますよ。国家試験も危ういような学生はちよつと危険ですけど。

荻野 国家試験って今後変わっていきますか？
千鳥 変えなきゃいけないと思います。
荻野 変えなきゃいけない。でも、なかなかそれを僕らのレベルだと変

えることつて難しい。協会の関係も色々あるとは思ひ。ただ、国家試験に認知運動療法についての問題が1問出れば、臨床場面だけじゃなくて学校教育も劇的に変わると思っています。学校で教えなきゃいけないことになりますから。

千鳥 そうそう。あの僕らの国家試験の時代から神経運動学的アプローチの問題を解いていた。あれは、国家試験に出ているからですね。

荻野 そうだと思います。
千鳥 だから知らない教員も勉強しないとイケない。ただ、今、例えば理学療法法のハンドブックみたいな理学療法とかのテクニクみたいなのが載っている本には必ず認知運動療法がありますよね。ないのがないぐらいです。だからそういった意味ではかなり認められてきているのかなという気持ちはするから・・・

荻野 臨床場面や本の中で認められるというのはあるかもしれないですけども、ただ国家試験というものに出てこない、なかなか教育つて変わらないじゃないかと正直思います。

千鳥 それは同感ですね。

荻野 じゃあ、どうやったら国家試験に1問載るのかっていう方略は、僕は持ち合わせていないというのが正直なところですよ。地道にやつていって、無視できないようになるしかないのかなと思いますけど。僕らはやつぱり患者さんを治していつたり、結果を残したり、患者さんにお願ひして研究をしたりとか。

千鳥 役割分担ですからね。

荻野 同じことはできませんよね。

千鳥 する必要はないと思います。

荻野 国家試験の話の延長にはなるのですが、例えば、1年生2年生と

かで様々な基礎的な話をすることも多いと思います。僕もある学校とかで運動学を話しています。僕が認知運動療法を勉強し始めたっていうところは、そんな知識よりはむしろ脳のことをしっかりと勉強しなければいけないというイメージがあつて、解剖学や運動学の方の勉強っていうのが一時期、僕の中でなおざりになったときがありました。でも、最近基礎的な知見、つまり解剖学的にこうなっている、運動学的にこういう動きがあるのだっていうのを知らないとなりの動きとこの違いを創り出せないということをしごく感じています。その辺の基礎的な知見のことについて先生はどう思われますか？

千鳥 いや、もう言われた通りだと思います。やっぱり外部観察があつて内部観察がはじめてあるわけだから、外部観察すら満足にできない場合に、内部観察したつてあまり意味がないと思います。だから今までの解剖だとか、当然生理もそうだし、運動学だつてそれは基礎としてやっぱり知っておくべきだと思います。でも、それだけで展開しようとするとう無理が出てくるから他に考えなきゃいけないこともあるんじゃないかってことですよね。まずは外部観察ができることが大事だと思っています。

荻野 多くの学校が大体1年生の頃に、解剖学や運動学などの勉強をして、2年生とか3年生ぐらいになると疾患に関する勉強、最終学年に近くなつていくことによつて理学療法、作業療法について教育されていますよね。どうしてもそれが直列的理解、例えばある基礎医学やつて、臨床医学やつて、で、臨床みたいに直列的になつてしまつている。本当は並列的な勉強をしていかななくてはいけないので、なかなか難しいと思うし、基礎的な知見の重要性というものをいかに理解させるのかということもすごく重要

で、それも臨床実習の大きな使命だとは思っています。今年のマスターコース（注7）に出させていただいて、ゼルニツ先生の講義を聴いたのですが、そのゼルニツ先生のスライドが美しいのです。図の多くがカパンデイで、すごくきれいで見やすく分かります。その後に、あの先生は相当にカパンデイを読みこんでいるという話を聞きました。だから、認知運動療法を行う上で基礎的な知見、仮説をつくるための理論においても、すごく重要なんじゃないかと思いました。基礎的な知見に関連して、先生は、研究をどのようにとらえていますか？

千鳥 研究発表、様々なEBMのランクがあつたりしますよね。一番下に症例報告というものがあるわけで、そこからだんだん順位が上がつてくるのだけでも、できるだけ上を目指したような研究がないのじゃないのかな、別に症例報告を否定しているわけじゃなくて、少しでもその土台に僕はのるべきだと思つているから。あとは臨床の研究と同時に基礎の研究も一緒に進めていくべきじゃないかな。

荻野 基礎研究はなかなか臨床の場面ではできないと思いますが、先生、今、基礎研究について何をしていますか？

千鳥 脳波を用いて高齢者における情報処理の違いについて観察することをしています。今、教員をしているということもあるのだけれど、やはり、患者さんに協力してもらつてというのは難しいから、健常者と高齢者の違いだとか、そういう基礎研究をやつていこうかなと思つています。

荻野 僕は一時期、ケーススタディの中でも、シングルケーススタディを勉強していました。ランダムマイゼーション検定とか使つたりし

て。

千鳥 介入効果を明確にするための手法ですね。それは必要だと思います。

荻野 ケーススタディとか一症例報告みたいなものは、いわゆるEBMの中でも低い位置にありますよね。でもそれは、積み重ねだと僕は思います。

千鳥 一人一人患者さんは違うわけだから、こういう人にはこういうふうにした方が良くなったと積み上げていけばいいと僕も思います。それを論文としてまとめる必要があるのじゃないでしょうか。いわゆるメタ分析みたいなかたちでやっていく、これが理学療法、作業療法の中で今、すごく苦手なところだと感じています。認知運動療法の研究をするにしても、そういった手法を使ってどんどん発表していくようなことってすごく大事なんじゃないかなと思います。それと、いわゆる研究の中でも質的研究とか、量的研究という言い方がされていますよね。やっぱり、量的も、質的も、もちろん両方とも重要だと思えますし、ただどうしても分析しやすいのが量的研究なので、様々な量的研究が多く出てきています。質的研究は、社会学とか看護学とか、一部作業療法でもやられていたりしていますが、質的研究っていうものを、もつともつと取り入れるようなことをしていかないといけないのではないのでしょうか。

千鳥 発表するところを考えた方がいいのかな、という気もしますね。例えば全国的な理学療法の学会だと、外部観察で記述しなければいけないし、結果どうなったのかというところを一番求められるから。

荻野 検証して批判を受けるようなことをして、より良いものを考えて

いくことが将来にもつながっていく気もしますね。

学術集会、そして2027年へ

荻野 さて、将来ことを話す前に、去年の学術集会について少し話したいのですが、去年の学術集会お疲れさまでした。1年経ったのですね。知らない人もいるかもしれない。

千鳥 多くの人が協力してくれて本当に助かりました。

荻野 このフォーラムに参加している人の中には学生もいるので簡単に説明しましょう。去年の2007年に愛知県名古屋市で第8回日本認知運動療法研究会学術集会を開催しました。その学会長と、学術集会の準備委員長として僕ら2人が関わらせていただきました。それが去年の7月14日15日だったのです。あのときの経験としては、僕の中では、色々な人の話を聞き、そして一つのものを作り上げる大変さ、自分でこう考えているということを人にうまく伝えられないこのもどかしさ、それをすごく感じました。準備委員長として、先生も相当大変だったのじゃないですか？

千鳥 準備委員長なんてやったことなかったし、一番準備に関しては、頭を働かせないといけない役割だったのですけどね。色々な人から指摘というか「ここは考えていますか？」みたいに助言してもらったりして本当に助かったし、やっぱり、仲間って大事だなって思いました。一人では限界があるから、補完していくようなシステムっていうのは必要なのだなと、すごく感じましたね。一人ではとてもできない。

荻野 一人では絶対に出来ないですね。皆さんの協力があつてできたと思っているし、僕の中ではかけがえのない宝物です。去年作られた抄録集というの僕のも宝物になっています。メインカラーが緑

でしたね。緑という色に対して、ものすごく思い入れがある。明らかに2年前と去年とでは緑に関する考え方が変わったから、これだけ人って経験によって行動が変わるのだな、というのを痛感しました。そういう意味では、認知運動療法に出会うことによつて様々な意識的な経験をしような気がします。去年の学術集会について補足することあります？

千鳥 いやー、辛くて楽しかったですね、

荻野 唯、終わった後のビール、本当にうまかったですね。

千鳥 本当に楽しかったよね。あれは。

荻野 やっている途中の時には、楽しいなんてことは一つも思えませんでした。ただ今、振り返れば、すごくいい経験で、すごくいい仲間に出会えたので、そういった仲間とこれからも、臨床を語っていきなりたいと思います。先生と僕がここまで、腹を割って話せるようになったのも、やっぱり、昨年の学術集会があったからかなって思います。最後に将来とか展望を僕らが話さないといけないのですが、この展望について何かありますか？

千鳥 2027年って、先生が・・・。

荻野 ちなみに、「2027年のリハビリテーション訓練室に向かう」

というのは、去年の学術集会の中で、発表された認知の樹プロジェクトのタイトルから取ったものです。「2027年のリハビリテーション訓練室に向かう」の2027年の意味、それは何かと云いますと、2027年というのは、僕、荻野が60歳の定年を迎える年です。学会長の荻野が、20年後に定年退職をむかえる、その時にいつたいどんなリハビリテーション訓練室があるのか、創造されているのか、ということを見現化しようということと考えられました。20年先なんてあつというまでですよ。僕が2027年

になった時に、定年退職する時にはたして日本の中で訓練室では、

どのようなリハビリテーションが行なわれているのか。そこに向かって我々は何をしていかなければいけないのでしょうか？今、僕が臨床にいる、先生が教育にいる、これから若い人たちがどんどんでくる、その時に僕らがはたして何ができるのだろうか？

千鳥 たぶん、日本認知運動療法研究会の理事のみんなが、それを考えているのだと思います。ちなみに僕、2年早く定年するのですけど・・・。

荻野 2025年ですね。

千鳥 日本の臨床が変わってほしいということは考えてやっています

よね。でも全部、すべてがこれになるということもありません。いいと思います。そうなるのがいいとは思いますが、医療経済的な理由も含めて、これは無理だと思えます。けれども、僕たちの中で臨床と教育が結びつくようなシステムが20年後にはもつと大きくしっかり構築されていけばいいかなと思いますよ。

荻野 今、先生がおっしゃったことに集約されていますよね。臨床と教育

で一つのチームを作れる、例えば先生が教育の中で様々なその知見の話をして、僕らがそれに対して、具体例というような形で学生に見せて、その学生が自ら能動的に考えて道を選択できる。それが積もり積もって将来的なりハビリテーションの未来というものにつながるのでしょうか。唯、それは理想かもしれない、単なる理想かもしれないけど、でもやって行かないといけない。僕らは目の前に患者さんがいるわけで、その患者さんを治すということ、これを絶対忘れちゃいけない、保身的なこととか、何々のためということというのは、やっぱり、患者さんのためというところが大前提にこないといけない。臨床と教育のチームを作るとい

うのは目指していききたいですね。

千鳥 うちの大学じゃないけれども、卒業する学生が「認知運動療法をやっている病院に行きたい」と言われたのですね。「どこですか」と聞いた時にその学生の家が愛知県の北の方だったのかな、先生のところいいじゃないと僕も話をしたのだけれど、とてもかよえない女性でしてね。そうすると、その学生は行けないということになってしまう。だから、あちこちで勉強できるところがあれば、希望どおりに行けたりするわけだし、そういうシステムというか教育と臨床がリンクしているような環境があれば一番いいかなと思います。

荻野 そういったことを考えながら、これからも仕事をしていきたいなと思いますね。僕らもまだまだやらなければいけないこともあるし、様々なことを考えながら、どんどん勉強して、また後輩の人たちを育てながら展望に向かって進んでいきたいなと思います。今日は、どうも有難うございました。

(2008年9月6日 国府病院リハビリテーション科にて)

注1 ベーシックコース

高知県桂浜荘で開催された第1回ベーシックコースは1997年開催。日本認知運動療法研究会発足は2000年4月。第1回のベーシックコースは研究会発足前であった。

注2 パラダイム本

協同医書出版から1998年に出版されたCarlo Perfetti他著の「認知運動療法 ―運動機能再教育の新しいパラダイム―」を示している。通称「パラダイム本」。

注3 身体感覚を取り戻す

日本放送出版協会から2000年に出版された。著者は現在、明治大学文学部教授の斉藤孝氏。

注4 ことばが劈(ひら)かれるとき

ちくま文庫から1998年に出版された。著者は1925年生まれの竹内敏晴氏。演出家であり、演劇創造とともに障害者療育にもかかわる。現在は名古屋在住。

注5 脳の中の幽霊

角川書店から1999年に出版された。著者はカリフォルニア大学サンディエゴ校神経科学研究所所長のヴィラヤナル・S・ラマチャンドラン氏。

注6 心を生み出す脳のシステム

日本放送出版協会から2001年に出版された。著者はソニーコンピュータサイエンス研究所リサーチヤーの茂木健一郎氏。氏には第7回日本認知運動療法研究会学術集会(学会長:森岡周)で特別講演をしていただいた。

注7 マスターコース

日本認知運動療法研究会の教育コースはベーシック・アドバンス・マスターと3段階設定されている。研究会会員で、かつアドバンスを修了した者はマスターコースの受講資格がある。マスターコースは2004年から毎年イタリアの認知神経リハビリテーションセンターで行われており、昨年度で第5回を数えた。